主　論　文　要　旨

No.1

報告番号	甲　第　　号	氏　名	速水　淑子

主 論 文 題 名：

トーマス・マンの政治思想――失われた市民を求めて

（内容の要旨）

社会における共通の価値尺度の不在は、二〇世紀を通じて多くの思想家の考察の対象となってきた。「先験的無故郷性」（ルカーチ）、「芸術作品の真正さの失効」（ベンヤミン）、「空虚さ」（ブロッホ）、「ニヒリズム」（プレスナー）、「手すりなき思考」（アーレント）といった概念は、それぞれ差異を含みながらも同一の思想的原状況を表現したものとみなせよう。とりわけ第一次世界大戦後からナチスの政権獲得にいたるまでのワイマール期は、急激な社会変動によって、それまで人びとの意識空間を一定程度秩序づけてきた伝統的な価値基準すなわち市民的人文主義の諸理念が根底から揺るがされた時期であった。

本稿の目的は、ドイツの作家トーマス・マン（Thomas Mann, 1875-1955）の政治思想を、市民的人文主義の諸概念が失効したこのような原状況に対する応答として読み解くことである。

その内容をあらかじめ総括すれば、マンの思想的歩みは、よるべき価値基準が失われた等価性の世界で実存的社会的中心をどこに求めるかという問いに、市民的世界の遺産を救い出すことで答えようとするものであった。マンは市民的諸価値がリアリティを失い社会的基盤を失ったという現状を認識し（第一章）、一時期は政治と内面的領域を截然と分離することを主張したが（第二章）、次第に政治と内面的世界が共有しうる新しい価値基準を求めるようになった。新しい価値基準を求めるこの試みの成果が、有機体への共感を中心にすえたマンの人間論、宇宙論、国家論であり（第三章）、一九世紀的な教養概念と人文主義概念の再生、教養および人文主義と「社会主義」との結合であった（第四章、第五章）。しかし、そうした諸価値のリアリティをかつて支えていた市民的世界の「伝統」や「コモンセンス」はすでに失われている。そこでマンはこれらの諸価値を、基本的には形而上的な真理として主張し、その認識に際して「物語」の果たす役割を強調するようになった（第六章）。

本稿の目的は上記のようなマンの精神的軌跡を追うことにある。マンが向き合った思想的原状況は現代日本においても一定程度あてはまり、こうした原状況と格闘したマンの軌跡から、われわれは価値尺度の中心を失った世界への反応の諸パターンとその問題点を学ぶことができると思われるからである。

このように本稿ではマンの思想を「歴史的に与えられた社会的思想的原状況」に対する応答として読み解く立場を採る。こうした広範なコンテクストに加え、各章においては、より局所的な政治的社会的コンテクストが参照される。次節にみるように、マン研究においては、現実の政治と時局に疎い

「無知な魔術師」（ゴーロ・マン） としてのマン像も存在してきた。しかし本論でみるように、マンの小説と論説の大部分は同時代の政治状況への応答として読み解くことができる。その様子は、マンの個別の発言や作品における叙述にとどまらず、小説の構造そのものにもみてとることができる。たしかにマンの回答は一見してわかるようには意図されておらず、多くの解釈の余地を残し、さらにときにあまりにもユートピア的と思われる。しかしその執筆活動が時局への自覚的な応答であったという意味においては、マンはどれほど迂遠な形であっても「政治的作家」（ゾントハイマー）であると考えられるためである。

マンの「市民性」はマン研究の初期から DDR とドイツ連邦のどちらにおいても多くの論者によって論じられてきたが、「市民性」の意味するもの（ブルジョワ性、反ブルジョワ性、非政治性、政治性、啓蒙主義、ロマン主義、リベラリズム、多元的思考、義務観念等）は、それ自体論議の対象となってきた。この点について本稿では、マン自身が市民性をどのように理解していたかを確認することから出発したい。

蓋しマンの市民性概念は、中世都市市民を脱政治化し、一九世紀の教養市民層の特徴を付け加え、それによってブルジョワと市民の区別を（政治的基準ではなく）文化的基準によって行おうとするものであった。このような概念的操作によって得られた市民性は史実とは異なるユートピア的な性格を帯びる。ユートピアとしての市民的世界においては、存在するもの、社会道徳に適うもの、自己実現の三者が予定調和的に一致し、あらゆる存在を肯定する「市民的諦念」のエートスを維持することが可能であった。しかし現実にはこのような一致は望めない。マンはこうした矛盾を市民的世界の崩壊として描き、その際に「芸術家」に社会から超越した特権的地位を与え、世界をありのままに肯定する市民的諦念のエートスを引き継がせた。このように、市民的世界の予定調和が不可能となった世界で、現実から離れ、世界の外部から存在を肯定するまなざしが、「芸術家のイロニー」であった。本稿ではこのように、マンの市民性を、予定調和的で非政治的な市民的世界のユートピアにおける諦念のエートスによって特徴づけ、それが芸術家のイロニーへの変容しつつ引き継がれたとの立場を採る（第一章）。

市民的諦念と芸術家のイロニーはともに（前者は非政治的ユートピアの住人であるがゆえに、後者は現実の世界の外部に存在するがゆえに、）非政治的な精神態度であるが、このような精神態度はユートピア的な理念として、あるいは現実から超越した形而上的な理念としてのみ可能であり、現実には政治とのかかわりが問題にならざるをえない。この問題はマンにおいてはまず、第一次大戦の勃発とともに顕在化した。マンは『非政治的人間の考察』において、政治と内面的領域を截然と切り離し、後者において芸術家のイロニーを可能にしようとした（第二章）。

しかしこうした政治のあり方を可能にすると思われた「官憲国家」たる帝国が崩壊すると、マンはあらゆる存在に向けられていた共感を、一定の範囲に限定し、社会の内部でのその実現を可能にしようと試みる。その結果、マンの市民性の概念は、諦念とイロニーの持っていた抽象性を失い、具体的

主　論　文　要　旨

な内容を持ち始める。ロシアとドイツにおける一連の革命をきっかけとして、マンは東の共産主義と西の議会制デモクラシーの間に、ドイツに独自の政治的形態を探るという課題を自らに課すようになった。マンはこうした課題の受け皿としてワイマール共和国に期待を寄せるようになった。その過程でマンは、共和国ないしデモクラシーに反対して主張した内面性と政治の分離を再考することになった。東西の間にドイツ的共同体を見出すという課題に導かれて、マンは生命と共同体についての独自の宇宙論および人間論を獲得し、個人性と社会性を両立させるエートスとして、有機体への共感を主張した（第三章）。

マンは生命と共同体に関する独自の宇宙論の信憑性を担保するために、教養と人文主義の伝統に助力を求めた。人文主義的諸概念は、個人の意識と慣習的共同体の規範が批判的に互いを参照しつつ相即的に発展するという理想的過程を共通の前提としていた。実際にはこの過程がドイツにおいて順調に展開してきたとは言い難く、むしろ教養と人文主義の歴史はそうした理想の蹉跌の例に満ちていた（第四章）。

マンはこうした歴史を振り返り、人文主義の価値が社会性を失い特殊内面的なものに還元されてきたことを批判し、社会的連帯と個人的内面的な自己涵養を併存させる理念として「新しい人文主義」を主張するようになる。マンはこの理念によって、（一）個人を共同性に埋没させる「蒙昧主義」（ボルシェヴィズム、ファシズム）を批判すると同時に、（二）社会的に無制約な利己主義的自由主義（フランス保守主義）を批判し、さらに（三）政治と内面性を切り離すことができるという幻想の上に立ったドイツ保守主義を攻撃した。他方でマンは、社会的連帯への関心という観点から「社会主義」を支持し、その実現をワイマール共和国に期待した（第五章）。

マンは生物学、医学、物理学、民俗学、宗教学など同時代のさまざまな分野の諸研究を参照し、そうした諸研究がさらに発展して新しい人文主義の大きな潮流を作ることを期待した。しかし一方でマンの時代は、「真理」という概念自体への不信、人間の拠るべき規範が存在するという観念自体への不信に覆われていた。こうした不信は「理性」への不信と結びつき、のちに国民社会主義に流れ込んでいくような反理性主義思潮の台頭を招いた。反理性主義思潮に対抗して自らの宇宙論と人間論を基礎づけるために、マンは精神分析と各地の豊饒神話を手がかりに、どのようにして「真理」に到達しうるかという認識論的問題に取り組んだ。そこでマンが展開したのが、「真理」は現象の世界とは異なる形而上的世界に「原型」として存在しており、それを把握するためには陶酔や夢といった非合理的な経験を必要とするという考え方であった。さらにマンが重視したのは、非合理的な経験を通じて獲得したその「原型」の認識を、理性によって意識化し、言語によって再現前化することであった。こうして、マンは個人的内的自己涵養と社会的連帯の並存を可能にするエートスとそれを支える宇宙論と人間論を、人間が普遍的に従うべき「原型」とみなし、物語を通じてそれを繰り返し再現前化することに、自身の使命を求めたのである（第六章）。